

事務局 〒028-3310 紫波町日詰駅前1-10-2 赤石公民館内 Tel 019-676-3999

1 2 月 5 日、赤石公民館ホールで開催した第 2 6 回定期講演会において、当日、講師がパワーポイントを用いて講演した内容から、ごく一部の事柄について紹介します。

演題 『 樋爪と平泉（歴史と伝説の整理） 』

講師 千葉信胤氏 岩手大学平泉文化研究センター客員教授
平泉文化遺産センター参与

伝説考 樋爪五郎について

江島(えのしま)は、宮城県女川町の沖合に浮かぶ島で牡鹿諸島における唯一の有人島である。

＝ 江島における樋爪五郎季衡の伝説＝

『文治5年、頼朝の奥州征伐のとき、樋爪五郎季衡は追手から逃れるため江島に渡った。そのとき季衡は金鶏を伴っていた。しかし、その金鶏は夜な夜な鳴くので、頼朝の追手に気づかれることを恐れ、季衡は金鶏を根の鼻(岬の名)に埋めて隠した。

数年後、埋めた所を掘り返してみると、金鶏はなくなってしまった。季衡は「なんと惜しいことをしてしまった。」と思ったが、「これも神の意思だ。」と思い直したという。

その後、季衡は江島の開発に尽力し、里人たちに信望をえた。そして、この島に住む者は、鶏を飼ってならないという遺言をした。里人たちは、季衡の遺言を守り、現在でも鶏を飼うことがないという。』

なお、江島にある久須師(くすし)神社には、島の開祖として樋爪五郎季衡が祀られている。

当日は、33名が聴講しアンケートの感想要望欄に記入あったので、その一部分を紹介する。

- ・ 講義内容が豊富で大変勉強になった。・ 先生の声は大変聞き易く分かり易い解説であった。
- ・ スクリーンをもっと鮮明に映るようにされたい。・ パワーポイントの資料を配布されたい。
- ・ 樋爪と平泉について違う視点で聞けてよかった。・ 樋爪と平泉が身近に知ることができた。
- ・ 難しい人物の名前や背景が改めて学べた。・ 平泉関連以外の遺跡寺院を取り上げてほしい。
- ・ 樋爪五郎の伝説は初めて聞いた。まだまだ知らない話があるのではと思った。
- ・ 樋爪氏は、どうして石川県に移住したのか、その理由を知りたい。



パワーポイントを使用して講演する千葉信胤氏

《《《 令和4年1～2月行事予定のお知らせ》》》

令和4年1月19日 (水曜日)	第126回 月例発表会	午後7時から午後9時 会場 赤石公民館 講義室 発表者：宇部 真澄 テーマ「ある南部杜氏の回想1」 発表者：高橋 敬明 テーマ「滝名川の砂金」
令和4年2月16日 (水曜日)	第127回 月例発表会	午後7時から午後9時 会場 赤石公民館 講義室 発表者：宇部 真澄 テーマ「ある南部杜氏の回想2」 発表者：平井 和夫 テーマ「三陸沿岸地域の製鉄遺跡について2」

11月17日に開催した第125回例会月発表会において、二人の講談の概要と、一人の発表者が用いました資料からほんの一部の文面を抜粋して紹介いたします。

岡村日出子さんの講談
「よみがえった古代蓮」



講談をする岡村日出子さん

昭和25年、中尊寺の奥州藤原氏遺体学術調査において、泰衡の首桶に入っていた蓮の種子を、調査団の大賀博士が研究用にと保管していた。それを引き

継いだ長島時子女史が生命工学で平成6年に開花。5年がかりで栽培にこぎつけ、平成11年に平泉中尊寺に移植した。

泰衡の首桶に入っていた蓮の実の言い伝えは、『文治5年(1189)源頼朝が陣ヶ岡に陣を敷いた。そこへ泰衡の首が持ち込まれた。泰衡の首は晒し首にされたが、その後密かに祖父母らが眠る平泉中尊寺に運ばれて安置された。

その運ばれる途中、五郎沼の傍にある大莊厳寺で泰衡の供養を行い、その時に五郎沼にある蓮の実を泰衡の首桶に入れたのが、種子となり八百年経ってよみがえった。』ということである。

平成14年5月28日中尊寺から株分けされた蓮が五郎沼の池に里帰りし、現在の姿となった。

大沢斗志子さんの講談
「お蓮(れん)」



講談をする大沢斗志子さん

円光寺にはお蓮の伝説を伝える首塚がある。

江戸時代の前期延宝3年(1675)、切支丹とされた材木商が小鷹の刑場で斬首された。

盛岡藩の奥女中の娘お蓮は悲嘆し、闇夜、父親のさらし首を盗み出し寺々をまわるが、門は閉ざれていた。幸い、円光寺のくぐり戸が開いていたので、生首の回向を嘆願すると、良親和尚は厳罰覚悟で受けてくれた。

夜が明けてお蓮が自首するとおとがめは逆に、盛岡第四代藩主の南部行信公はその孝心をほめ、やがて側室となり、世子の信恩(のぶおき)公が誕生した。

円光寺には首塚が建てられ、50石を給付。

お蓮の方は父の菩提のために観音堂を建立し、平景清の墓所、日向国(宮崎県)延岡にあった十一面観音像(別名、生目観音)を遷座したと伝えられている。

平井和夫氏の発表資料「ひづめ 館」漢字表記 (「館」の表記について
「比爪館」か! 「樋爪館」か!

● 紫波町史 館

紫波町史 第一巻 (昭和47年〔1972年〕3月25日発行)

「凡例」より抜粋【⇒樋爪氏 使用】

古代は開拓時代・安部氏時代・清原時代・樋爪氏時代の四つに区分し、中世は河村・斯波氏時代と斯波氏時代に二分した。

第四章 樋爪氏時代 より抜粋【⇒すべて、樋爪氏・樋爪館 使用】 (たて: 館)

当地域には、平泉藤原氏の分族である樋爪氏が居住し、樋爪館を本拠として支配していた。従って本史の立場からいえば、この時代は樋爪氏の時代とすることができる。

● 紫波町指定文化財を指定 館

昭和50年〔(1975)3月25日〕紫波町指定文化財を指定の際は「樋爪館跡」となった。

解説

奥州藤原氏の一族樋爪(比爪)氏の中心的拠点です。これまで32次にわたる発掘調査が行われ、多量の「かわらけ」や国産陶器、中国産陶器、多数の井戸跡や住居跡、建物跡が見つかっています。樋爪館跡には「大莊厳寺」という寺院があったことも伝えられており、政庁・寺院・居住施設などの機能を持った場所であったと推測されます。藤原氏に関連する県内でも有数の遺跡です。

※紫波町史作成後は「樋爪館跡」が多くなったが、発掘調査報告書には引き続き「比爪館」を使用。